

## 香川県 H24 ニホンジカ生息状況調査結果まとめ

### 1. 生息密度指標とその経年変化

#### (1) 小豆島地域

図1に得られた生息密度指標をメッシュ図に示し、図2に全ての調査地の結果をもとに、平成12年度を100としたときの相対的な推移を示し、表1に同じメッシュで実施した平成21年度と今年度の地域別生息密度指標平均値を示した。

平成21年度と今年度の結果を地域ごとに見ると、南部は大きく減少しているが、北部と東部では微増したことがわかる。

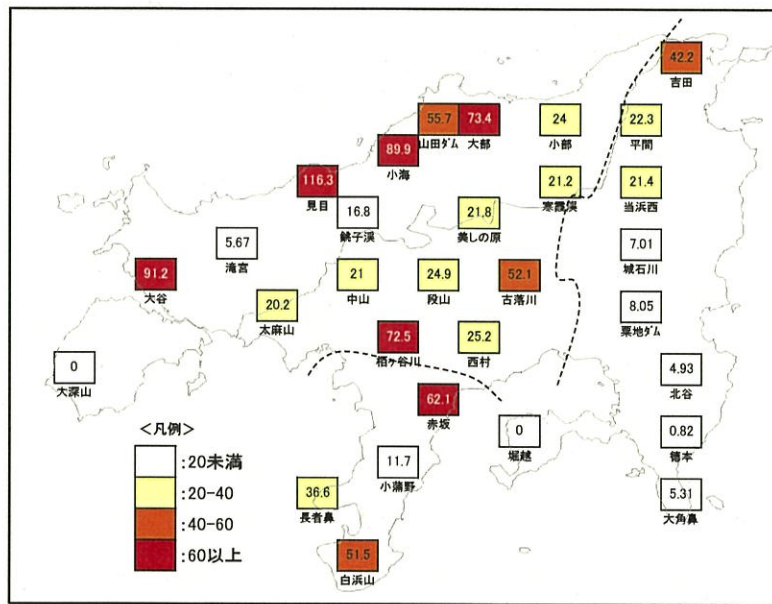


図1 小豆島地域におけるメッシュごとの生息密度指標 (単位: 頭/km²)

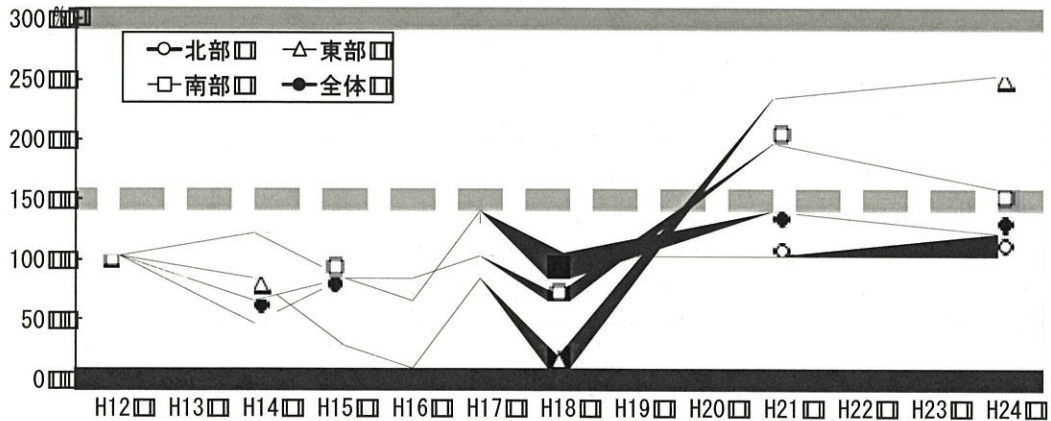


図2 平成12年度を100としたときの地域別生息密度指標の推移(小豆島地域)

表1 調査継続メッシュにおける地域別生息密度指標平均値(小豆島地域)

	平成21年度	平成24年度	増加率 (H24/H21)
北部	41.9	49.3	1.18
東部	10.9	6.9	0.63
南部	54.3	40.5	0.75
全体	35.2	36.0	1.02

(2) 本土地域

図3に今年度得られた生息密度指標をメッシュ図に示し、表2に生息密度指標の一覧を示した。

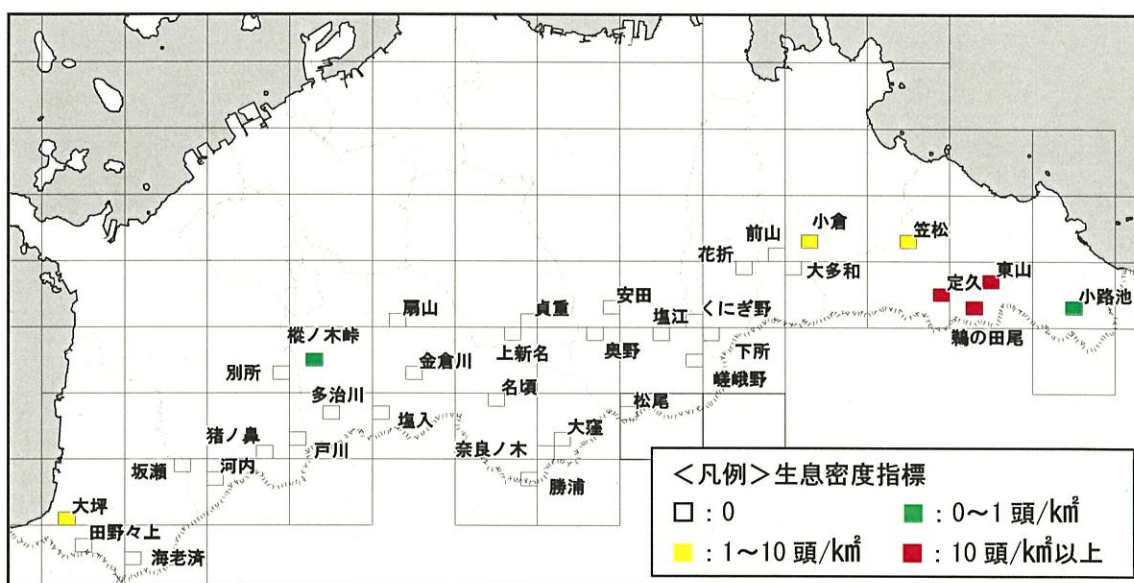


図3 本土地域におけるメッシュごとの密度指標

表2 本土地域におけるメッシュごとの生息密度指標一覧

調査地区名	密度指標 (頭/km <sup>2</sup> )	調査地区名	密度指標 (頭/km <sup>2</sup> )	調査地区名	密度指標 (頭/km <sup>2</sup> )	調査地区名	密度指標 (頭/km <sup>2</sup> )
田野々上	0	多治川	0	大窪	0	大多和	0
海老済	0	縦ノ木峠	0.2	松尾	0	前山	0
大坪	2.3	金倉川	0	奥野	0	小倉	9.0
坂瀬	0	塩入	0	嵯峨野	0	定久	38.4
河内	0	名頃	0	塩江	0	東山	12.4
猪ノ鼻	0	上新名	0	下所	0	鶴の田尾	20.8
別所	0	扇山	0	安田	0	笠松	1.3
戸川	0	真重	0	くにぎ野	0	小路池	0.5
勝浦	0	奈良ノ木	0	花折	0		

## 2. 森林植生衰退状況調査

### (1) 小豆島

下層植生のうち、グラミノイド、広葉草本、ササ類及び低木をシカの餌植物として、それぞれの植被率の点数を調査地点ごとに合計し、メッシュごとの平均を算出し下層植生影響度とした（図4）。下層植生影響度は値が低いほど、シカの餌となる植物が減少していることになり、シカの影響が大きいことを表している。

また、累積利用圧を表すものとして注目している矮性低木の点数を低木全体の植被率の点数で除した割合を図5に示した。東部地域では、まだ利用圧が高まっていないか、シカの利用が始まってまだ長時間が経過していないことがわかる。

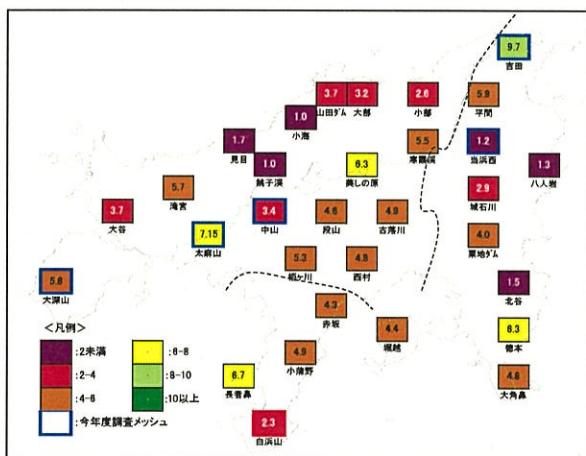


図4 下層植生影響度（小豆島地域）

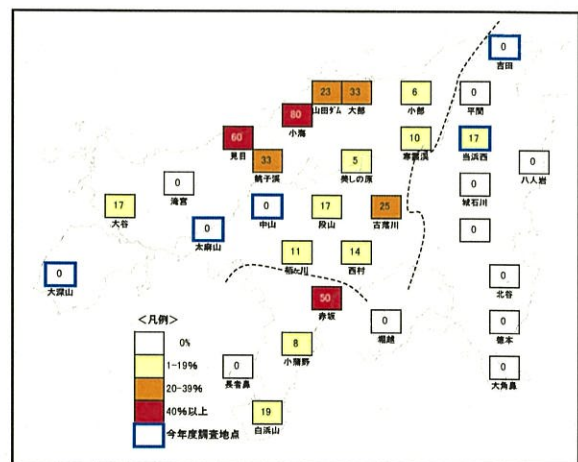


図5 矮性低木植被率の点数／低木植被率の点数

### (2) 本土地域

シカの利用状況の総合評価のために①糞粒密度から算出した生息密度指標、②糞粒法調査の際に確認した樹木への加害強度、③下層植生影響度である。これらについて以下の様に点数を与え、全ての点数を加算してそれぞれのメッシュの総合評価点とし、図6に示した。

東讃地域が最もシカの利用が多く、観音寺市西部及びびまんのう町に利用のやや多い地域があることがわかる。そして、それらの3地域に挟まれた、三豊市及び高松市からさぬき市西部にかけての地域は利用が少なく、特に、三木町周辺地域でシカの利用が最も少ないと思われる。

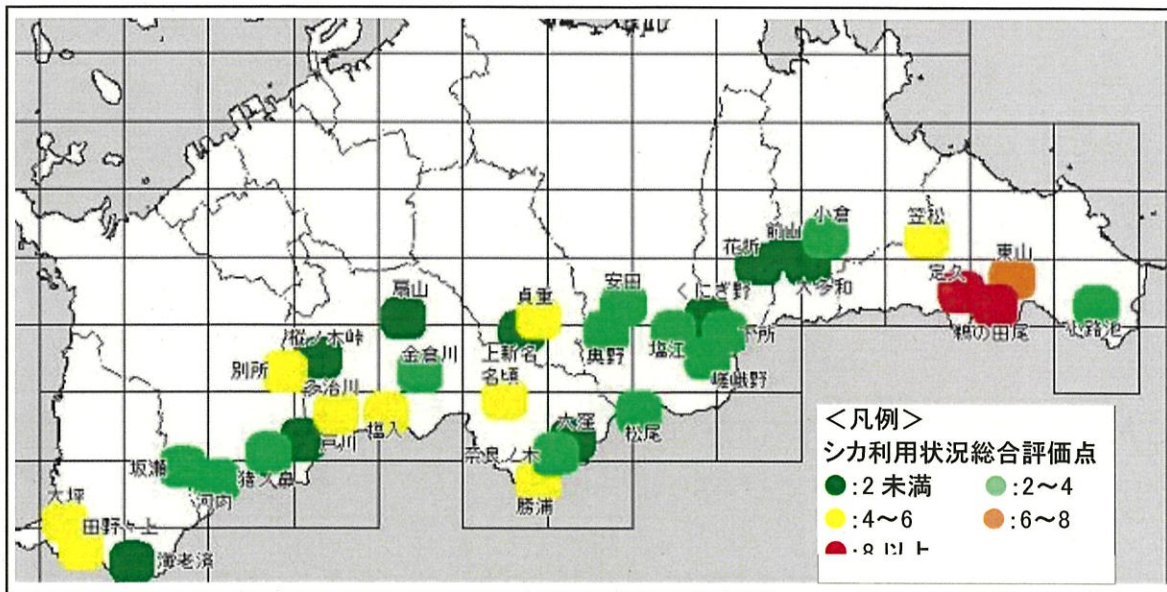


図6 シカの利用状況に関する総合評価

(参考：密度指標と森林植生衰退との関係)

平成21年度の調査において、小豆島 FUNRYU プログラムによって算出されたシカの生息密度指標が20頭/km<sup>2</sup>を超えると、密度上昇に伴い植生の衰退が進行することが示され(図7)、小豆島地域の自然植生の存在する森林環境においてシカの密度を管理するには、生息密度指標20頭/km<sup>2</sup>がひとつの目安になると考えられた。

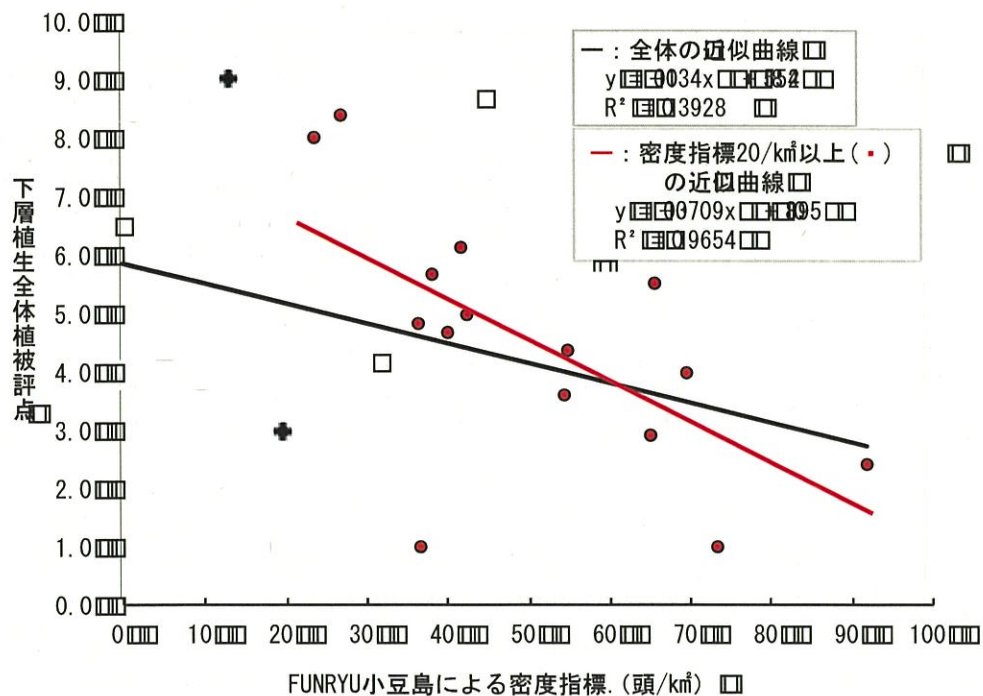


図7 密度指標と下層植生全体の植被率評価点の割合の関係

### 3. 小豆島における捕獲の効果

平成 21 年度と平成 24 年度に同じメッシュで糞粒法調査を実施した地点について、当該メッシュとその周囲 8 メッシュ、計 9 メッシュの平成 21 年度から平成 24 年度(12 月末) までの総捕獲数を図 8 に示す。また、同様に 9 メッシュごとに、平成 21 年度から平成 24 年度(12 月末) までの総捕獲数を平成 21 年度の捕獲数で除した値を図 9 示す。

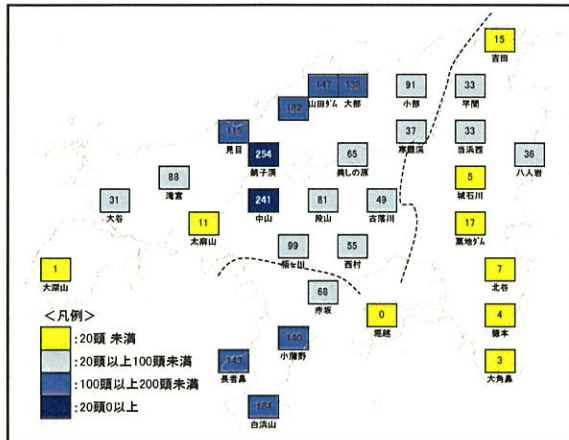


図 8 周囲 8 メッシュを含む  
平成 21~24 年度総捕獲数

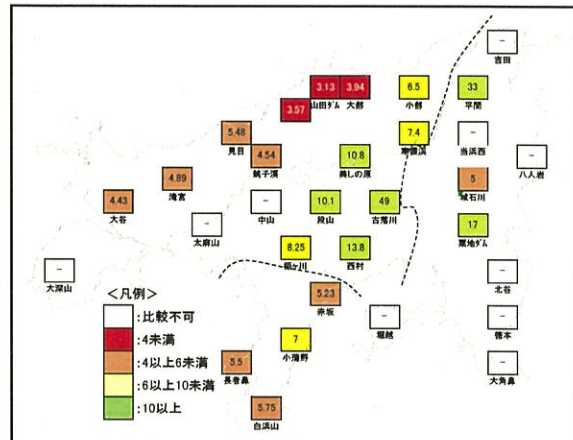


図 9 平成 21 年度の捕獲数を基準とした  
平成 21~24 年度総捕獲数の増加割合

図 10 に生息密度指標の増加率を示し、平成 21 年を基準とした捕獲数増加割合 (図 9) と生息密度の増加率の関係を図 11 に示す

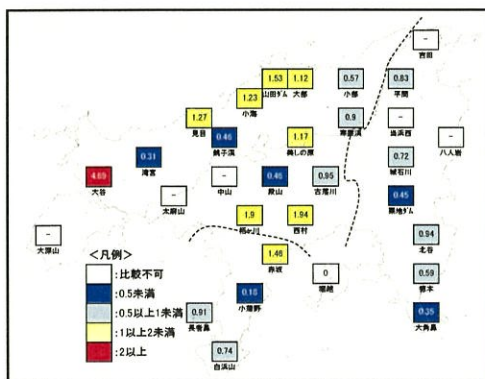


図 10 H21 に対する H24 の  
生息密度指標の値



図 11 生息密度指標の増加率と 3 年間の捕獲数増加割合との関係  
(H21 年当時の生息密度指標が 20 頭/km<sup>2</sup>以上のメッシュから  
離れ値の平間と古落川を除いて作図)

段山や小蒲野のように過去 4 年間で前年以上の頭数を捕獲していた地域でシカの生息密度が低下し、小海、山田ダム、大部では捕獲実数は多いが捕獲数増加割合が低く、シカの生息密度低減につながっていないことが示された。